

『ぶどうの木と農夫とわたし』 ヨハネ15:1-5

15:1 わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。

15:2 わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。

15:3 あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。

15:4 わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。枝がぶどうの木につながっていないければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていないければ実を結ぶことができない。

15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

●序論

すでに大人にはなっている子どもたちたちのために、今のわたしに何ができるか…。ただ、何よりも神さまについていってほしい、そう祈ることです。

家族にはつながりがあるからこそ、祈ってあげられるという関係があります。また教会でも、共に過ごす兄弟姉妹だからこそ、気づいて、とりなし祈ってあげられる関係がある、機会がある、そして、そういう祈りの世界こそが教会であると気づかされることがあります。

そして、聖書はいつでも、わたしたちをイエスさまと、そして父なる神さまとの親しい交わり、親しい関係へと招いてくれます。

ヨハネは、その手紙の中でクリスチャンたちを招いてこういう風に語りました。

すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。

それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。

わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。(1ヨハネ1:3)

そういう意味で思い起こすと、以前、このヨハネの福音書でわたしたちとイエスさまと父なる神さまとの関係を示す言葉がありました。

しかし、彼(イエスさま)を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は(父なる)神の子となる力を与えたのである。(ヨハネ1:12)

このつながりの中におかれて、わたしたちは日々、子としていただいた恵みと特権を経験しつつ歩ませていただいています。

そして今日お読みしたところで、「わたしはまことのぶどうの木」と表現しつつ、父なる神については「農夫」と呼び。そして、このたとえを聞く「あなたがたは枝です」と語ります。

そして この関係の中でのキーワードとして、聖書は繰り返し「つながる」という言葉

を用いて表現しています。それは、いのちをつなぐ関係であることがわかります。それこそが、「ぶどうの木であるイエスさまと、農夫である父なる神、そして枝であるわたし」をあらわすつながりなのです。

○本論

I. 送りだされる弟子たちへのたとえ

ここは、最後の晩餐のときの記事。つまりあの十字架にかかる前夜に語られた、イエスさまの最後のたとえ話です。

これから弟子たちが目撃するのは、とらえられ十字架にかけられるイエスさま。さらに経験するのは、そのイエスさまを見捨てて逃げ出す自分たちの姿。

そこで恐れを、失望を経験する様子が描かれます。

つらいだろう、苦しいだろう、悔しく痛みの伴う経験をするだろう彼らを思う。

しかしイエスさまは、彼らの弱さやつまずいた姿だけを見ていたのではありません。

将来回復されて立ち上がる彼らの姿を信じ、思いつつ語っておられたということです。少し後の16章の1節にはこうあります。

わたしがこれらのことを語ったのは、あなたがたがつまずくことのないためである。(16:1)

そして新たな旅立ちに、新たな関係をこのぶどうの木のたとえで表しているということです。それは霊的、神秘的、そしてもっとも祝福された関係への招きです。

15:4 わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。

II. 手入れしてくださる神さまの姿

15:2 わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。

新改訳聖書では、「手入れをする」を「刈り込みをする」と訳しています。

そこには「痛みが伴う」というお話がぐぐっと心に迫ります。

これらは、実際のぶどうの育て方のノウハウであることとわかるのですが、いざ、自分を枝の立場に置いたとき、「手入れ」というやさしい言葉ではなく「刈り込み」に伴う痛みがあるということを知らされたからです。

さらに、ヨハネはそのつながりに続けてこうも語ります。

15:3 あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。

「御言葉にチャレンジされる」という表現があります。

これは、み言葉に従うことを迫られるということ。

そうして、そのことに向き合うことで「きよめ」「聖別」されるということ。

つまりイエスさまに属する者、つく者となるという意味です。

聖書のことばによって、心さぐられる経験、自分の願いや計画とは違う方向へつか

わされる経験、個人的に大切と思うものを手放さなければならない経験をすることです。

そんなわたしたちのためにこのぶどうの木のたとえは語られています。

そこで、絶望して、終わってしまうことなくキリストにつながり続けることができるようにと。

ここにある農夫に例えられる父なる神さまの手入れには、深い愛情があります。

わたしたちがキリストにつながり続けて、その命の祝福を経験でき、「もっと豊かに実をみのらせるために」という期待と関心をもって、自分に手をかけてくださっているということを知らされているのです。

だから、この手入れを受けていること、み言葉に取り扱われる経験、今あるジレンマや問題さえも、神さまの愛の御手に触れていただいているという経験だとわかります。

この2節には、「実を結ばないものは、父がこれをとりぞき」という怖い言葉もありますが、信じて生きるわたしたちに向けては「実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。」とあります。

そのプロセスにあるつらい経験の中にも、そこには農夫なる父なる神さまのまなざしと深い愛があることを覚えていただきたいのです。

Ⅲ. いのちの源であるイエスさまの姿

15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。

これから手入れ（刈り込み）を受ける弟子たち、痛い経験をするだろう弟子たちのために、イエスさまは、このぶどうの木のたとえをくださいました。

そんなイエスさまは、これからだれよりも自分が、最も苦しくつらい経験をされることをご存じでした。

鞭うたれ、辱められ、十字架にはりつけにされて人の罪と呪いをすべて受けて苦しみ死ぬという経験を前にしていました。

そんな中でなお、ここで残して行く弟子たちのことを思い、み言葉を語り掛けていたということです。

「わたしにつながっていなさい」(：4) というイエスさまの言葉は、シンプルな弟子たちとわたしたちへのチャレンジです。

しかし、自分が置かれている環境や課題、問題の中で、しばしば後回しにされがちなわたしたちの歩みはないだろうか、そんなことを思われます。

「確かに、わたしたちは、主を憎むことなないでしょう。でもどこまで主を愛して、

つながっているのでしょうか？」

そして何よりも、わたしたちはこの方をかけがえのない、いのちの源と知っているのでしょうか？

15:4 わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。

私たちの人生には、このイエスさまとのつながりによってしか経験することのできない実りというものがあります。それは神さま由来で、他に替えがききません。

そしてそれは、私たちを愛しておられる、農夫・父なる神さまご自身が、私たちに、結んでほしいと愛の手を入れ、望んでおられるものなのです。

「わたしにつながっていなさい」。イエスさまとつながることに心を向けましょう。

実を結ぶということは、いのちの証となります。だからつながってなければ…と語られているのです。

○おわりに

たとえば、子育てにおいて、子どもとその人生を支配することはできません。

すでにわたしたちのほとんどが、親離れ、子離れしているはずです。

ただその時に、伝えることができることは、「Put God First」イエスさまを第一とせよ！、そして、イエスさまにつながり続けよ、ということです。

いや、だれに対してもこの言葉は有効です。

つながっていると、必然、刈り込みの伴う経験があります。痛い経験があるのです。御言葉を聞くと、今それ聞きたくない…と思うような言葉に迫られることもあるかもしれません。

しかし、その時こそ、かけがえのない実りへのチャンスだと知ってほしいのです。聖書のことばをもう一度確認しましょう。

…実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいなさるのである。(：2)

とあるからです。